はじめに

わたしは、医科大学にて、脳のはたらきについて研究しつつ、生理学全般の教育を行っています。

大学で生理学を教えるときに感じるのは、解剖学はクリアしても、生理学でつまずく学生がけっこういる、ということです。生理学は、暗記科目ではないので、その考え方を身に付けてもらうまでには、やはり時間がかかるのです。とくに脳のはたらきについては、なにやらとっつきにくいと思う学生もいるようです。生理学のなかでも、脳のはたらきに注目した学問分野を「脳生理学」といいますが、この脳生理学には、要素還元主義的な科学に収まりきらないところ、すなわちものごとを要素に分解して理解するだけでは捉えきれないところがあり、これにより他の器官を学ぶときとは異なる難しさを感じてしまうようなのです。

こうしたなか、2024年3月に北九州にて行われた第101回日本生理学会大会の教育プログラムで、脳生理学についての教育講演をする機会がありました。そして、その講演を聴いてくれていた羊土社の吉田雅博さんからお声がけいただいたのです。

このときわたしは医科大学の図書館長という立場にあり、学生さんたちが「本を読むこと」のハードルが、以前よりも高くなっているのではないかと感じていた背景もあって、同じく羊土社の田頭みなみさん、増本奈津美さんも交えて相談していくなかでたどり着いたのが、

「ちょっとした読み物を読んでいくと、脳のはたらきが分かっていく」

という本がつくれないか、という方向性です。

このためこの本では、いわゆるふつうのテキストよりも、だいぶ読み物風の書き方をしていくことになりました。そして、そのストーリーも、誰しもの生活に関わるもの、すなわち失うと生活に困るような脳のはたらきを中心に組み立てていくこととなったのです。

この本では、まず脳のはたらきについての土台となる知識について整理します。そして、道具と言語を操る脳のはたらきといった、失うと生活に困るような脳のはたらきについて、じっくりとお話ししていきます。さらには、最近注目されている脳に対するあたらしい捉え方や、脳生理学研究と先端科学技術とのつながりについても触れていきます。

こうして生まれたこのサブテキストを手にすることが、脳のはたらきについての深淵なる世界を楽しむきっかけになればと思っています。

2025年10月

神作　憲司